たじみのたからもの89

陶器将軍 加藤助三郎③
多治見と助三郎

問 文化財保護センター 岩井　TEL 25-8633

6月号に引き続き明治時代の陶器商・満留寿商会加藤助三郎についてご紹介します。

明治28年（1895）に満留寿商会は多治見に本店を移し、その後東京支店を引き払って長年暮らした東京から多治見に拠点を移しました。同31年に助三郎は岐阜県陶磁業組合長に就任し、土岐郡・可児郡・恵那郡の陶業者のリーダーとして活躍していきます。また、助三郎は窯業技術を支える人材育成の必要性を訴え、同年7月には岐阜県陶磁業組合の付属施設として岐阜県陶磁器講習所（現多治見工業高校の前身）を開所しました。多治見工業高校には現在も助三郎が寄贈した陶磁器参考品が数多く残されています。なかには全国や海外の製品のほか、明治元年から明治末までの年号が記された美濃焼参考品もあり、当時の美濃焼の年代指標ともなる貴重な資料です。

また、助三郎は父・助四郎とともに寺社への献納が多かったことも知られています。市之倉町永明寺をはじめとして新羅神社、平野町金刀比羅神社、虎渓山永保寺、土岐市の中山神明宮、内津妙見寺、長野県善光寺などの灯籠に助三郎の名をみることができます。

▲平野公園にある加藤助三郎表功碑

同41年（1908）2月に助三郎は長年の功績により緑綬褒章を受章しました。しかし翌月の3月13日、持病の労咳により52歳の若さでこの世を去りました。各分野でめざましい活躍を続けた助三郎の死を悼み同45年（1912）、平野公園に表功碑が建てられ、現在も4月の陶祖祭で功績を讃える神事が行われています。

文化財保護センター企画展
「陶器将軍 加藤助三郎」（～8月24日）

土岐川観察館の自然だより

青と緑の物語

問 土岐川観察館　TEL 21-2151

多治見にもいる日本の国蝶 オオムラサキ

「日本で一番美しいチョウは？」と問われたら、私はオオムラサキを挙げます。翅をひろげれば10㎝もあり、雄の翅は優美な光沢のある青紫色です。和風の美を代表するチョウだと思いませんか。

▲写真① オオムラサキの雄。
樹液に来た時が、美しい翅を見る機会

幼虫は、丘陵地の谷に多いエノキで育ちます。6月から7月にかけて羽化し、成虫は8月まで雑木林で生活します。力強くはばたいて梢を越えて飛びます。花を訪れることはなく、樹液を栄養源にします。

夏の雑木林、多様な昆虫が樹液に集まって競争が激しいのですが、オオムラサキはスズメバチやクワガタにも遠慮しません。写真②は樹液に来た雌です。カナブンが小さく見えますね。

大きくて美しく、力強いチョウ。オオムラサキはチョウの王様です。

▲写真② 樹液を吸う雌。
クワガタやカナブンより強く、
優先的に樹液を得る

写真①②は市内で撮影したものです。このような光景はどこで見られるのでしょう。成虫が生きるには、樹液を豊富に出すナラやカシの大木がたくさん必要です。しかも木立の間隔が広く風通しのよい林でなければオオムラサキはやってきません。つまり、手の行き届いた明るい雑木林です。

雑木林を維持するにはたくさんの人の手が必要です。オオムラサキの生息地は減るばかりで、準絶滅危惧種になってしまいました。市内でも行われている雑木林の再生活動は、多様な生き物たちを救う大切な取り組みです。

（多治見昆虫会 横井洋文）

地域で興味のあることを市職員が説明する「おとどけセミナー」をぜひご利用ください